



Title	京都府南部における動詞否定形式「～ヤン」の受容とその要因：否定辞に対する話者のイメージを中心に
Author(s)	永田, 雪恵
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2023, 19, p. 26-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92431
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

京都府南部における動詞否定形式「～ヤン」の受容とその要因

—否定辞に対する話者のイメージを中心に—

永田 雪恵

【要旨】

近畿中央部では動詞否定形を作る否定辞として、伝統的には、方言形の「～ヒン／ヘン」「～ン」が用いられてきたが、くだけた会話の中では標準語形「～ナイ」が使用されることも指摘されている。また先行研究では、近年若年層において、これら3つの否定形式に加えて新たに「～ヤン」という否定形式が見られ始めたことが明らかにされている。本研究では、京都府南部の若年層を対象にアンケート調査を行い、京都府南部の若年層にも「～ヤン」の形式が流入していることを示した。ただしその受容は限定的なものであり、より短い拍数の形式へ変化する中で「～ン」「～ナイ」が使われていたところに、「～ヤン」が新しい選択肢として登場していることが窺えた。さらに「～ヤン」を含む否定辞の使用には方言意識も関わっており、否定辞に対するイメージ調査の結果からは、京都府南部の若年層が基本的には「～ヒン／ヘン」を使用したいと考えていることがわかった。「～ヒン／ヘン」よりも「～ン」「～ヤン」「～ナイ」を使用する方が言いやすい、もしくは伝わりやすいと考えられる場合には話し手が「印象が良い」と捉えている形式を用いるというスタンスがあると考えられる。

【キーワード】～ヤン、動詞否定形式、関西方言、ことばのイメージ

1. はじめに

近畿中央部では動詞否定形を作る否定辞として、伝統的には方言形「～ヒン／ヘン」「～ン」が用いられてきた。そしてくだけた会話の中で、標準語形「～ナイ」が使用されることも指摘されている。しかし近年若年層において、これら3つの否定形式に加えて新たに「～ヤン」という否定形式が見られ始めている。以下は、それぞれの否定形式の例である。

(1) 明日は友達と会うから勉強 {シーヒン／セーヘン／セン／シナイ／シヤン}。

先行研究では、「～ヤン」は三重・和歌山の若年層から、大阪・奈良に流入しつつあることが明らかになっているほか、語に対して持つイメージが受容の動機の一つであると述べられている（詳細は2節を参照）。

先行研究には京都における「～ヤン」の使用についての指摘がないが、京都府出身である筆者自身は「～ヤン」の形式を使用しているほか、他の京都府出身者が「～ヤン」を使用しているのを耳にしたこともある。そのため、京都府南部¹⁾の若年層でも「～ヤン」の使用が見られ始めているのではないかと考えた。そしてその受容の背景には否定辞に対するイメ

1) ここでは平山編（1997）の方言区画に基づき山城方言域とする。以下、「京都府」「京都府南部」は山城方言域である「亀岡市を除いた京都市以南」とする。

ージが関わっているように思われる。本研究では京都府南部に焦点を当て、アンケート調査によって「～ヤン」受容の実態と、その背後にある方言意識を分析したい。

本論文の構成は以下の通りである。2 節では、主に「～ヤン」に関する先行研究をまとめる。続いて 3 節で、本研究で行った二つの調査の概要を示し、その結果を 4 節と 5 節に分けて記述する。それらを踏まえて 6 節で考察を行い、最後に本論文のまとめ (7 節) と参考文献を示す。

2. 先行研究と問題のありか

ここでは主に、関西方言の否定辞と「～ヤン」に関する先行研究についてまとめる。

2.1. 関西若年層における否定辞の使用

関西若年層における否定辞の使用について、以下では、高木 (2004) で指摘されている内容を整理して述べる。

高木 (2004) によると、若年層関西方言の否定辞としては、方言形である「～ヒン／ヘン」「～ン」に加えて、標準語形の「～ナイ」が使用されている。なお、近畿地方では従来「～ン」が主流であったが、後に「～ヘン」が台頭しその勢力が拡大したことなどが、岸江 (2014) で明らかにされている。各否定辞の使用実態を活用型ごとにみると、五段動詞では「～ン」が優勢であるのに対し、一段・カ変・サ変動詞では「～ヒン／ヘン」が多用されているとある。中でも一段動詞では「～ン」の使用が突出して少なく、これは音韻的制約が働いていることに起因する。音韻的制約とは、「～ン」による否定形に /d/, /m/, /n/ 音が後続すると、動詞の終止・連体形の撥音化形と同音になってしまうため、これを回避することである。たとえば「見んもん」と言った際、「見るもん」の撥音化形とも、「見ないもん」という意味ともとれるために、否定としての「見んもん」の使用が避けられることなどが、この例である。動詞の拍数に着目すると、「～ン」の使用は 3 拍以上の五段動詞に偏っており、「～ナイ」は 2 拍の一段動詞に多い。しかしながら、3 拍以上の五段動詞において～ンを多用しているのは「わかる」のみであり、これを除けば「～ヒン／ヘン」が依然として優勢である。つまり「わかる」を除けば基本形で最も多く用いられる否定辞は、動詞の活用型、拍数に関わらず「～ヒン／ヘン」である。一段動詞 2 拍語の否定において「～ナイ」が多く見られるのは、「～ヒン／ヘン」が長呼形（ミーヒン、ネーヘンなど）をとることと関係している。特殊な形態である長呼形をとる「～ヘン」を避け、さらに音韻的制約が働く「～ン」を避けた結果、「～ナイ」が使用されているということである。

このように関西の若年層では基本的には「～ヒン／ヘン」が用いられている。そして一段動詞 2 拍語の否定形では、長呼形となる「～ヒン／ヘン」を避け、さらに音韻的制約が働く「～ン」を避けるため、標準語形の「～ナイ」が使用されることがある。ただし高木 (2004) では「～ヤン」に関する指摘はされていない。

2.2. 関西若年層の新しい否定辞「～ヤン」

ここでは、関西若年層の「～ヤン」の使用に関する先行研究についてまとめる。

日高（2014）において「～ヤン」は、「ミヤヘン」など「～ヤヘン」から変化したもので、元々和歌山県、奈良県、および三重県で使用されてきた表現であると指摘されている。そして鳥谷（2015）によると、大阪の若年層でも近年この「～ヤン」が動詞否定辞として、元々の「～ヒン／ヘン」「～ン」「～ナイ」の3形式に加えて急速に広まりつつあるという。これは三重・和歌山の若年層からの流入であると考えられ、鳥谷（2015）が大阪・奈良で行ったアンケート調査では、五段動詞以外の項目において、老・壮年層ではほとんど見られない「～ヤン」の形式が若年層において突如現れている。「～ヤン」の使用には拍数や形態との相関があり、具体的にはより拍数の少ないものでの使用が多く、否定過去形式（「～カッタ」）では使用が少なくなる傾向にある。また、調査において「～ヤン」の使用者の割合が最も高かったのは、一段動詞であった。

このように鳥谷（2015）では、「～ヤン」という新たな否定形式が大阪・奈良の若年層に広まっていることを論じている。一方で京都における広がりについては触れられておらず、その実態は不明瞭である。また、一段動詞において「～ヤン」の使用が多いことと、高木（2004）の指摘を踏まえると、長呼形を避け、さらに音韻的制約がある「～ン」を避けて「～ナイ」が使用されているところに、新たに「～ヤン」が流入している可能性を考えることができる。

また梁瀬（2020）では、田中（2013a）、田中（2013b）で示されている近畿地方出身者の方言意識や、各方言に対するステレオタイプ（詳細は2.3節を参照）を踏まえた上で、近畿地方出身の若年層を対象に動詞の否定形式へのイメージを調査している。具体的には動詞「寝る」を例に、「ネーヘン」「ネン」「ネナイ」「ネヤン」の4つの否定形式の印象が調査されている。調査によると、近畿地方出身者に最も「親しみ深い」と回答されていたのは「ネーヘン」であり、「ネン」には怖い、下品といったイメージを持つ者が多い。「ネヤン」に関しては、突出して他の形式と違ったイメージは見られないものの、「ネナイ」と同様に、一定数「かわいい」という回答が目立っていた。梁瀬（2020）はこれに対し、①もともと和歌山、三重、奈良で使用されていた表現であり「大阪（＝怖い）」のステレオタイプが当てはまらないために優しい印象が持たれていること、②女性の使用率が高いこと、③「ネヤン」「ネナイ」はともに馴染みのない表現・広まりつつある表現であることなどが原因であると分析している。

このように梁瀬（2020）では、「～ヤン」を含む否定形式の使用には方言意識や否定辞へのイメージが深く関わっていることが論じられている。また梁瀬（2020）の調査では、京都府出身者の「～ヤン」の使用はほぼ見られていない。山崎（2016）でも近畿地方出身の若年層を対象とした否定辞の使用実態の調査が行われているが、京都府出身者の「～ヤン」の使用はほぼ見られないと述べられている。

2.3. 京都府民の方言意識

田中（2013a）、田中（2013b）では、話者の生育地や居住地によって、方言や共通語に対する意識が大きく異なっていることが述べられている。中でも田中（2013a）では、近畿地方の人々は、生育地の方言が好きでどの場面でも方言を使い、共通語が嫌いであると記述さ

れている。さらに田中（2013b）では、日本語社会で生活する人々の頭の中にはそれぞれの方言と結びついた特定のイメージがあるとし、大阪弁は「おもしろい」「怖い」、京都弁は「かわいい」「女らしい」といったイメージと結びつきやすいという調査結果を示している。

そのような中で平山編（1997）では京都府民の方言意識について、京都の高校生は東京の言葉に対してマイナスの評価を、関西弁に対してプラスの評価を行ったとある。さらに、関西弁には京都と大阪という二つの核があり、互いに対抗意識を持っているという。

このように近畿地方出身者、中でも京都府民には独自の方言意識があり、大阪や東京といった特定の他の地域に対して対抗意識やマイナスイメージを持っていると分かる。梁瀬（2020）の調査も踏まえると、否定辞使用にもこのような府民の方言意識や、特定の方言に対するイメージが作用しており、独自の様相を呈している可能性があると言える。

2.4. 問題のありか

先行研究でみたように、関西の若年層の間で使われている方言形否定辞は主に「～ヒン／ヘン」「～ン」であり、一部標準語形の「～ナイ」も使われる。しかし近年これら3つの形式に加えて、奈良・大阪の若年層に、三重・和歌山など周辺部から流入した「～ヤン」が使われるようになってきているという指摘がある。鳥谷（2015）の先行研究では、奈良・大阪での「～ヤン」の広まりに焦点が当てられており、さらに梁瀬（2020）の調査では、京都府出身者の「～ヤン」の使用はほぼ見られていない。しかしながら大阪・奈良との物理的距離や筆者の観察などを踏まえると、京都府南部の若年層にも同様に新たな否定形式「～ヤン」が流入しつつあると考えられる。したがって、どの程度「～ヤン」が使用されているのか明らかにする必要がある。

また「～ヤン」の流入について、鳥谷（2015）は拍数との相関があると論じており、梁瀬（2020）は否定辞へのイメージが「～ヤン」の使用と関わっていると論じている。京都府南部に「～ヤン」が流入しているとすれば、同様のことが関わっているかもしれない。高木（2004）の指摘も踏まえると、音韻的制約や拍数の長さにかかわる否定辞選択の問題を解消するために「～ヤン」の形式が取り入れられている可能性もある。

さらに平山編（1997）では、京都の高校生が大阪に対して対抗意識を持っていることや、東京の言葉に対してマイナスの評価をしていることが述べられていた。こうした方言意識が今も存在していれば、「～ヤン」の受容に大阪や奈良とはまた違った要因がある可能性もある。

以上を踏まえ、本研究では次の点をリサーチクエスションとする。

- (a) 京都府南部の若年層にも「～ヤン」が流入しているのか
- (b) 「～ヤン」の流入が見られる場合、動詞の拍数や活用型との相関はあるのか
- (c) 「～ヤン」を始めとする否定辞の使用の背景には、どのような方言意識があるのか

3. 調査概要

本節では、2節で示した問題意識に基づいて行った調査の概要を述べる。

3.1. 調査対象

調査は、調査時まで最も長く住んでいた地域が京都府南部である大学生を対象に行った。対象者を若年層に絞っているのは、鳥谷（2015）から老・壮年層での「～ヤン」の使用がほぼ見られないことが明らかなためである。回答者は19歳～24歳の大学生60名（うち女性37名、男性23名）であり、以下《表1》に一覧を示す。なお表中の年齢は調査を行った2021年10月時点のもので、話者ID末尾の「M/F」はそれぞれ「男性(Male)／女性(Female)」を表している。「外住歴」の欄には、京都府南部以外の土地における居住歴を示した（外住歴のない場合は何も記載していない）。

表1 インフォーマント情報

	話者 ID	性別	年齢	外住歴（「あり」の場合に情報を記載）
1	AM	男	23	
2	BF	女	21	
3	CM	男	21	18-21:神奈川県横浜市
4	DM	男	19	0-3:福岡県福岡市
5	EM	男	21	
6	FF	女	22	
7	GF	女	22	18-22:三重県津市
8	HF	女	22	
9	IF	女	22	
10	JF	女	21	
11	KF	女	22	
12	LF	女	21	
13	MF	女	22	
14	NM	男	22	
15	OF	女	22	
16	PM	男	21	17-21:茨城県つくば市
17	QM	男	22	
18	RF	女	22	0-6:大阪府大阪市
19	SM	男	21	
20	TM	男	21	
21	UF	女	21	
22	VF	女	22	
23	WF	女	20	
24	XM	男	24	
25	YM	男	22	0-10:兵庫県伊丹市
26	ZM	男	23	
27	AAM	男	21	
28	ABF	女	22	
29	ACF	女	21	0-3:大阪府枚方市
30	ADF	女	19	
31	AEF	女	22	0-5:富山県富山市／19-22:北海道札幌市
32	AFF	女	22	20-21:大阪府箕面市
33	AGF	女	21	1-9:兵庫県西宮市
34	AHM	男	23	18-23:兵庫県神戸市
35	AIF	女	21	
36	AJF	女	21	3-5:岡山県高梁市
37	AKF	女	22	
38	ALF	女	21	0-4:京田辺市

	話者 ID	性別	年齢	外住歴（「あり」の場合に情報を記載）
39	AMF	女	21	
40	ANF	女	21	
41	AOF	女	22	
42	APM	男	24	
43	AQM	男	22	
44	ARF	女	22	
45	ASM	男	21	0-3:大阪府八尾市／3-4:三重県名張市
46	ATF	女	19	
47	AUM	男	20	19-20:大阪府豊中市
48	AVF	女	21	
49	AWF	女	22	
50	AXM	男	22	
51	AYF	女	21	
52	AZM	男	20	
53	BAM	男	21	
54	BBF	女	21	
55	BCM	男	22	
56	BDF	女	24	3-7:岡山県高梁市
57	BEF	女	21	
58	BFF	女	21	
59	BGF	女	19	
60	BHM	男	19	

3.2. 調査方法と調査内容

調査は選択肢式と記述式の Web アンケートによって行った。アンケートは全て Google フォームで作成し、協力者にはインターネットを通じて回答してもらった。

アンケートは、大きく分けて二つの内容から成る。一つ目は使用する否定辞についての調査で、二つ目が否定辞に対するイメージの調査である。使用意識に加え、イメージに関しても調査を行うことで、否定形式、ひいては方言に対する意識を分析することが目的である。それぞれの概要を以下、3.2.1 節、3.2.2 節にて示す。

3.2.1. 使用する否定辞の調査

動詞の否定形を使った標準語文を提示し、親しい友人との会話場面における「動詞+否定辞」の表現として自分の使うものを、選択式で回答してもらった（複数選択可）。使用する表現が選択肢にない場合は「その他」を選び、自由に記入してもらう。質問文は次の通り。

(2) 「友人との会話で以下のように言いたい時、どの表現を使用しますか？

使用するもの全てにチェックを入れてください。

選択肢以外の表現を使用している場合は、その他の欄にご記入ください。」

（以下、標準語文と選択肢を順に提示。《表 2》参照）

なお、調査に使用する動詞は鳥谷（2015）の調査を参考にしつつ活用型ごとに 2 拍の動詞を選び、拍数との相関を分析するため一段動詞のみ 3 拍・4 拍の動詞も選んだ。五段動詞については、先行研究や自身の内省から「～ヤン」の使用が見られないことが自明であるため、今回の調査では省いた。次ページ《表 2》に調査に用いた動詞とその例文、選択肢を示す。

京都府南部における動詞否定形式「～ヤン」の受容とその要因

表 2 調査例文と選択肢

拍数	活用	動詞	例文	選択肢
2 拍	上一段	見る	(1) 映画はあんまり「見ない」	a. ミーヒン
				b. ミーヘン
				c. ミン
				d. ミナイ
				e. ミヤン
	下一段	寝る	(2) 今日は勉強のために「寝ない」	a. ネーヘン
				b. ネン
				c. ネナイ
				d. ネヤン
3 拍	上一段	起きる	(3) 昼まで「起きない」	a. オキヒン
				b. オキヘン
				c. オキン
				d. オキナイ
				e. オキヤン
	下一段	食べる	(4) 晩ご飯を「食べない」	a. タベヘン
				b. タベン
				c. タベナイ
				d. タベヤン
4 拍	上一段	信じる	(5) 占いとか「信じない」	a. シンジヒン
				b. シンジヘン
				c. シンジン
				d. シンジナイ
				e. シンジヤン
	下一段	疲れる	(6) このスポーツは全然「疲れない」	a. ツカレヘン
				b. ツカレン
				c. ツカレナイ
				d. ツカレヤン
(2 拍)	カ変	来る	(7) 待ち合わせに友達が「来ない」	a. キーヒン
				b. コーヘン
				c. コン
				d. コナイ
				e. コヤン
(2 拍)	サ変	する	(8) 予習を「しない」	a. シーヒン
				b. セーヘン
				c. シン
				d. セン
				e. シナイ
				f. シヤン

3.2.2. 否定辞に対するイメージの調査

使用する否定辞を選んでもらう調査に続いて、否定辞に対するイメージの調査も行った。否定形式、ひいては方言に対するイメージや意識を分析するのが目的である。調査では梁瀬（2020）の先行研究を参考にし、「～ヒン／ヘン」「～ン」「～ナイ」「～ヤン」に対するイメージを尋ねた。具体的には、それぞれの形式について、次の2つのパートに分けて調査し、回答してもらう方法を取った。

(3) 5段階で評価するパート

- ① 性別のイメージ：「女性的」～「男性的」（5～1の5段階で評価。以下同じ）
- ② かわいらしさ：「かわいい」～「かわいくない」
- ③ 親しみ：「親しみがある」～「親しみがない」
- ④ 使用へのイメージ：「抵抗感がない」～「抵抗感がある」

(4) 自由に記述してもらうパート

- ⑤ 使われている場所のイメージ（地名、都会、田舎、など）
- ⑥ 使用者のイメージ（女性、上品な人、など）
- ⑦ 言葉自体のイメージ（柔らかい、かわいい、など）

標準語形についてもイメージ調査をすることで、「一段動詞 2 拍語においてこれまで標準語形「～ナイ」が使われていたところに新しい方言形式である「～ヤン」が積極的に取り入れられている」という本研究の仮説の根拠となるデータが得られるのではないかと考え、調査をデザインした。

4. 使用する否定辞の調査結果

ここでは、前節で述べた調査のうち 3.2.1 節で示した、使用する否定辞を選択してもらう調査の結果を示す。

4.1. 「～ヤン」の使用実態

まず、「～ヤン」のみの回答状況を取り上げ、その使用実態を探る。《図 1》は、各調査項目において「～ヤン」の回答者が何名いたかをグラフにまとめたものである。図より、全ての動詞において「～ヤン」を使用すると回答しているインフォーマントがおり、京都府南部の若年層でも「～ヤン」の形式が使用され始めていることは明らかである。「来ない」「しない」「見ない」では 1 割を超えるインフォーマントが「～ヤン」を使用すると回答している。

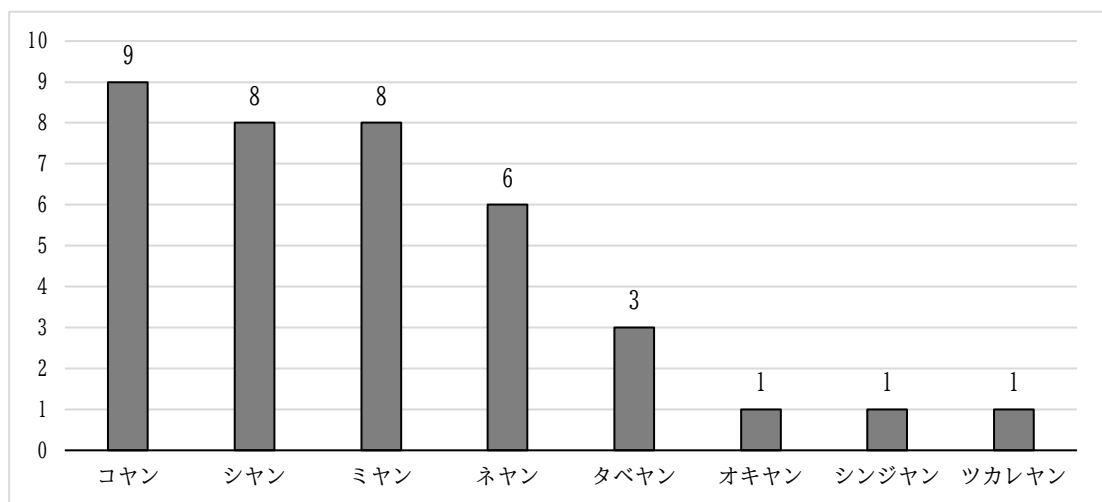


図 1 各調査項目における「～ヤン」の回答者数 (人)

続いて動詞の拍数に注目すると、「～ヤン」の使用には明らかに拍数との相関があることがみてとれる。2拍語（来る・する・見る・寝る）だけ突出して「～ヤン」を選択した人が多く他が少ないため、より拍数が短い否定形を選ぶ傾向があるようである。「～ヤン」の使用人数が少ない3・4拍語を除けば、どの活用型でも「～ヤン」の使用人数はほぼ同じであったため、今回の結果だけを見ると先行研究の結果に反して活用型との相関は少ない。

《表3》は、いずれかの設問において「～ヤン」を使用すると答えた13名（うち8名が女性、5名が男性）の回答状況をまとめたものである。表中の「●」が、その動詞において「～ヤン」を使用すると回答したことを示している。括弧内の数字は設問番号であり、「～ヤン」使用者が多かった語の順にならんでいる。また、図中の話者IDは《表1》で示したものと対応している。

表3 「～ヤン」使用者の回答状況

	話者 ID	2 拍語				3 拍語		4 拍語		話者別 合計
		(7) 来る	(1) 見る	(8) する	(2) 寝る	(4) 食べる	(3) 起きる	(5) 信じる	(6) 疲れる	
1	DM	●	●	●	●	●	●	●	●	8
2	BCM	●	●	●	●	●				5
3	BF	●	●	●	●					4
4	ACF	●	●	●	●					4
5	AXM	●	●	●	●					4
6	UF	●		●						2
7	ALF	●	●							2
8	AMF		●	●						2
9	BDF	●				●				2
10	IF	●								1
11	AUM		●							1
12	RF			●						1
13	NM				●					1
	調査語別 合計	9	8	8	6	3	1	1	1	37

《表3》から、拍数や活用型に関わらず全ての動詞で「～ヤン」を使用すると回答しているのは、1名（DM）のみであり、若年層全体としての「～ヤン」の受容は部分的である可能性が高い。また、3拍語・4拍語を避けるように「～ヤン」を使用しているインフォーマントが多く、拍数による使い分けの意識があると言える。

鳥谷（2015）の調査と同じく、女性が8名、男性が5名とやや女性の使用者が多いが、母数が少ないため、性別との関わりは不明である。

4.2. 「～ヤン」とそれ以外の形式との比較

ここからは、「～ヤン」以外の形式も含めた結果を見ていく。以下に示す《図2》～《図5》は「～ヤン」の使用が多かった2拍語についての結果である。《図2》に「見る」、《図3》

に「寝る」、《図 4》に「来る」、《図 5》に「する」の結果を示す。図中の数字は、インフォーマントのうちその項目を選んだ人数を示している。なお調査では自分が使用すると思うもの「全てに」チェックを入れてもらう方式をとり、複数回答を可とした。したがってこれらの結果は、「最もよく使う」表現を集計したものではない。

まず、先行研究で最も「～ヤン」の使用者の割合が高いとされていた一段動詞「見る」の否定形だが、《図 2》のとおり「～ヤン」の使用者がいるものの、依然として従来の形式「ミーヘン」が圧倒的に優勢であることが分かる。

1 割強のインフォーマントが「～ヤン」を使用すると回答しているが、鳥谷（2015）に記述されている大阪の若年層（19 歳～29 歳）へのアンケート調査では、最も使用する形式が「～ヤン」であると回答したインフォーマントは全体の 24.9%であった。鳥谷（2015）の調査では最も使用する形式のみを集計している一方で、今回の調査では複数の形式が選択可能である点も考慮すると、大阪の若年層に比べて、京都府南部の若年層の「～ヤン」使用者の割合は低いと考えられるのではないだろうか。

また、より拍数の少ない形式である「ミン」も見られたが、使用すると思う形式全てにチェックを入れる方式にも関わらず回答者が 60 名中 24 名であることから、半数以上の人々が「自分は使用しない」と考えているようである。

続いて、「見ない」以外の項目についてもその結果を見ていく。《図 3》に示した「寝る」、《図 4》「来る」、《図 5》「する」の否定形を見ても、従来の形式と比べると「～ヤン」使用者の数はわずかである。

また「～ヤン」と「～ナイ」の回答者数を比較してみると、どの活用型の動詞でもほぼ同じである。したがって、今回の結果を見る限り、先行研究の結果に反して活用型との相関は少ないように思われる。筆者は、音韻的制約の働く一段動詞に「～ナイ」が流入している中、それに代わるかたちで「～ヤン」が受容されているという仮説を立てたが、このデータのみでは判断が難しい。このことについては、イメージに関する調査結果とも照らし合わせながら、5 節以降で考察する。また、どの形式でも「～ナイ」の形式が一定数見られていることについては、梁瀬（2020）の先行研究の中の京都府に関する記述にも同様の結果が記されている。

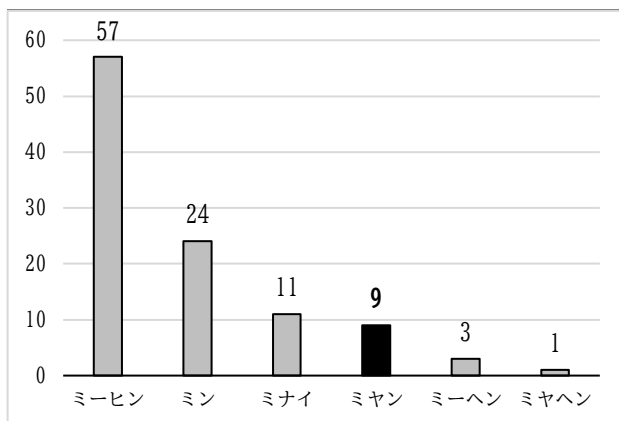


図2 「見る」の否定形（回答者数：人）

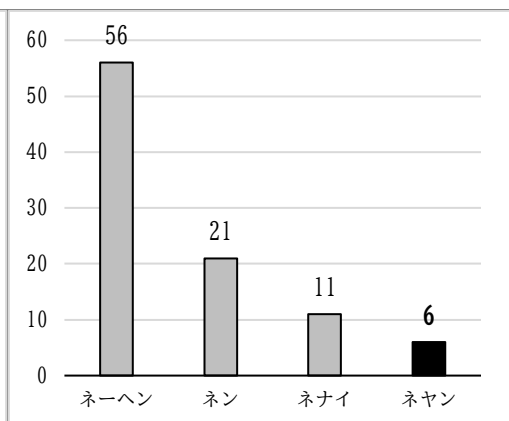


図3 「寝る」の否定形（回答者数：人）

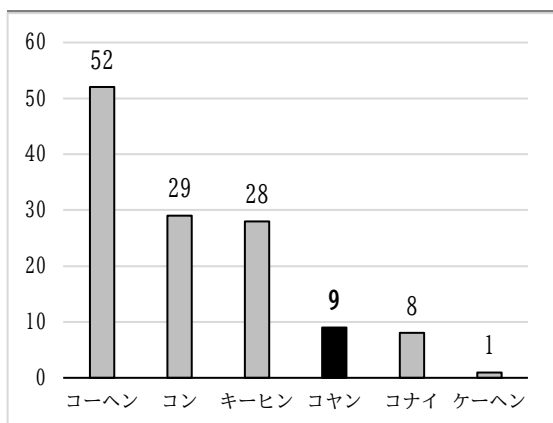


図4 「来る」の否定形 (回答者数：人)

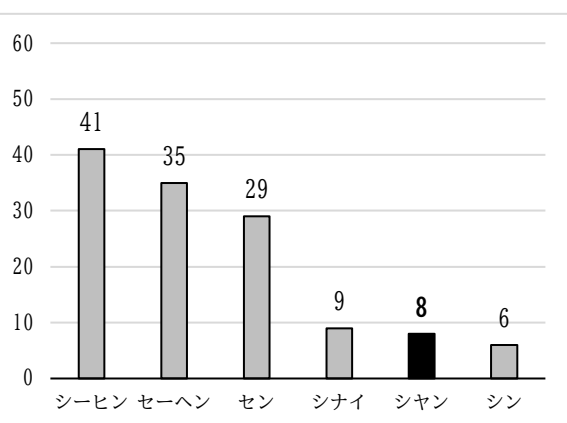


図5 「する」の否定形 (回答者数：人)

鳥谷 (2015) の大阪での調査と比較すると、カ変・サ変動詞の場合に大阪の若年層では「キーヒン・シーヒン」よりも「ケーヘン・セーヘン」の形式が優勢であるのに対し、京都では「キーヒン・シーヒン」の形式の方が好まれている。しかしながら、カ変動詞「来る」ではネオ方言形式と言われる「コーヘン」が「キーヒン」よりも回答数をはるかに上回る結果となった。これは大阪での調査でも同様に見られる変化である。

自身が使用すると考えられている否定辞の調査結果についてまとめると、まずいずれの調査項目においても「～ヤン」の使用は見られるが、従来の形式に比べるとその数はわずかである。「～ヤン」使用者の回答分布の検討からも、その受容は限定的であるようだ。そして動詞の拍数に注目すると、2拍語だけ突出して「～ヤン」の使用率が高いため、否定形の拍数がより短い方へ向かう流れがあるように思う。その流れにおいて「～ン」や「～ナイ」が受け入れられる中で、第3の選択肢として「～ヤン」が現れている可能性がある。

5. 否定辞に対するイメージの調査結果

本節では、3.2.2 節で示した否定辞に対するイメージの調査の結果を示す。具体的には、5.1 節で5段階評価の結果を、5.2 節で自由記述の回答を示し、5.3 節で否定形式ごとに分けて詳しく分析する。

5.1. 5段階評価の結果

《図6》は、各否定形式に対する「①性別のイメージ」「②かわいらしさ」「③親しみ」「④抵抗感」の4項目について、5段階で評価してもらうパートの結果である。それぞれ5に近づくほど「女性的」「かわいい」「親しみがある」「抵抗感がない」、1に近づくほど「男性的」「かわいくない」「親しみがない」「抵抗感がある」、となっている。また、図中の数字は回答者の数を示している。

まず、使用する否定辞の調査において圧倒的に使用率の高かった「～ヒン／ヘン」の形式に注目すると、やはり、「③親しみ」や「④抵抗感」において他形式よりはるかに「親しみがある (段階5)」や「抵抗感がない (段階5)」の回答が多い。「①性別のイメージ」「②かわいらしさ」の項目に注目すると、女性的でかわいい印象を持っている人が非常に多いこと

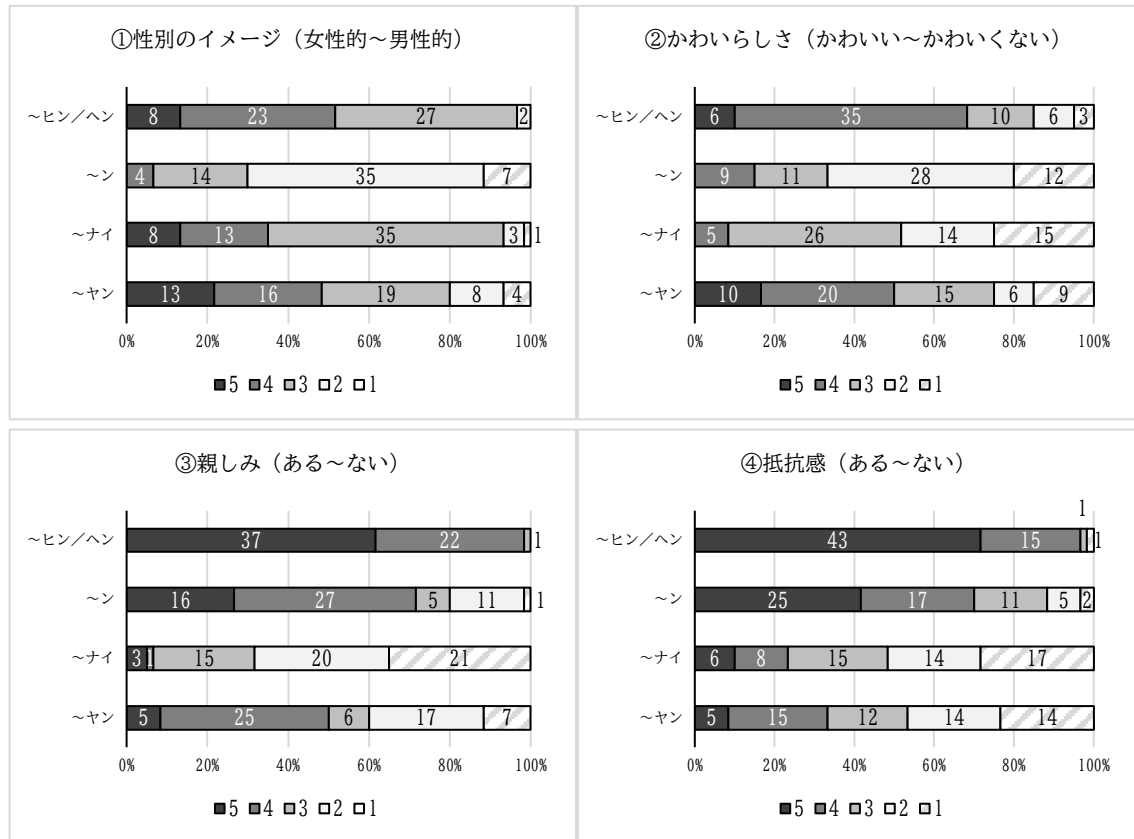


図6 5段階評価の結果

も特徴的である（段階5と段階4の回答合計がそれぞれ31件、41件）。

続いて「～ン」の形式では、同じ従来の方言形式である「～ヒン/ヘン」と比較すると特に「①性別のイメージ」や「②かわいらしさ」の項目において対照的な結果となっており、こちらは男性的と感じる人が多いようである（段階1・段階2の回答合計42件）。また「③親しみ」「④抵抗感」において「親しみがある」「抵抗感がない」（段階5や4）と回答する人は多いものの、「～ヒン/ヘン」と比べると少ない。

さらに、標準語形の「～ナイ」について見ると、5段階評価ではほとんどの項目において中間の「3」が占める割合が大きい。また「③親しみ」において「5」や「4」を回答している人が最も少なく、「かわいい」（段階5）と回答した人はいなかった。

最後に「～ヤン」について、まず「③親しみ」に注目すると、「5」か「4」を選ぶ人が多く、かなり「親しみがある」と感じている人が多いと言える。そしてその他3項目については、（ア）親しみがある人が多いことに反して「抵抗感がない」（段階5）の回答が4形式中最も少ないこと、（イ）「女性的」「かわいい」（段階5や4）という回答がやや優勢だが対極の印象を持つ人も少なからずいることが主な特徴としてあげられる。

5.2. 各形式への自由記述の回答

「⑤場所のイメージ」「⑥使用者のイメージ」「⑦言葉自体のイメージ」に関する自由記述の回答を《表4》にまとめる。表中に太字で書かれているものは複数名の回答があったもの

で、括弧内の数字がその回答者数を表している。なお、明らかに同じとみなすことができる回答（「女性」と「女の人」など）については、いずれかに統一して集計している。

まず「～ヒン／ヘン」だが、自由記述の回答では使用に抵抗を持つ人はみられず、むしろ「やわらかい」（14人）、「かわいい」（5人）など良い印象を持つ人が多い。それに対し「～ン」は5段階評価の結果と同様、「男性」（13人）、「やんちゃ」（6人）、「強い」（5人）など、

表4 自由記述の回答

否定辞	⑤場所のイメージ	⑥使用者のイメージ	⑦言葉自体のイメージ
～ヒン ～ヘン	京都 (31) 関西 (25) 大阪 (8) 京都市内 (2) 地元 (2) 奈良 街中 田舎 「ヒン」は京都で「ヘン」は 大阪	関西人 (12) 女性 (10) 京都人 (6) 上品 (4) 誰でも (3) 一般人 (3) 若い (3) 幼い (2) おしとやか (2) 明るい フレンドリー 陽キャ ²⁾ おっとり おばちゃん お笑い芸人	やわらかい (14) かわいい (5) 日常的 (2) 親しい人に使う (2) きつい (2) 使いやすい (2) 馴染み深い はんなり 上品 関西らしくて好き ラフ 正当な関西弁 穏やか 言いやすい
～ン	関西 (16) 大阪 (17) 京都 (4) 奈良 (2) 広島 (2) 京都ではない (2) 京都以外の関西 中国地方 岐阜 兵庫 神戸 田舎 西日本 都会 山科 ³⁾	男性 (13) やんちゃ (6) 強い (5) 怒っている (3) おじさん (2) 若い (2) 雑 (2) 頑固 (2) コテコテの関西弁に抵抗が ある (2) 短気 ずぼら がさつ やかましい 大阪人 おばちゃん 早口 朴訥 おとなしい フランク	強い (9) きつい (7) 抵抗あり (5) 親しみ (3) 適当な感じ (3) ラフ (2) 意志が強い (2) 頑固 (2) 怖い 治安が悪そう 雑 使われたくない 冷たい 言いやすい
～ナイ	関東 (27) 東京 (7) 関西以外 (6) 都会 (4) 公共の場 ニュース フォーマルな場 LINE	関東人 (9) 上品 (9) 誰でも (5) 冷たい人 (4) 標準語話者 (4) 東京人 (3) 丁寧 (2) 大人 (2) 親しくない間柄 (2) 真面目 しっかりしている 気難しい すましている 無個性	距離を感じる (4) 書き言葉 (4) 標準語 (3) 硬い (3) 親しみなし (2) 敬語 (2) 使いたくない (2) 面白くない 印象がない きちんとしている 他人行儀 伝わりやすい
～ヤン	奈良 (14) 田舎 (8) 三重 (7) 大阪 (7) 和歌山 (4) 兵庫 (4) 神戸 (3) 四国 (3) 滋賀 (2) 中部 (2) 阪奈線 京都の南 八幡 ⁴⁾ 木津 ⁵⁾ 京田辺 城陽 大阪の南 治安の悪いところ	女性 (10) やんちゃ (8) 若者 (6) 田舎者 (4) 大阪 (3) 強そう (3) 三重 (2) 奈良 (2) 京都 (2) 和歌山 (2) 育ちが悪そう (2) 上品でない よその人 「ヒン」等に飽きた人 ハキハキしている	かわいい (19) 柔らかい (6) 抵抗がある (6) 使わない (3) 違和感 (3) 田舎 (2) やんちゃ (2) くだけている (2) 目上には使わない 上品でない うるさい やさしい 使ってみたい 京都ではない

2) 「陽気なキャラクター」の意。

3) 京都市南東部の区の名称。

4) 京都府南部に位置する市の名称。表中の「京田辺」「城陽」なども同じ。

5) 京都府の南端に位置する「木津川市」を指すものと思われる。

男性的で粗野なきついイメージが大きいようである。「きつい」(7人)、「抵抗がある」(5人)など明らかに抵抗感を示す人が多いことも「～ヒン／ヘン」とは異なっている。

「～ナイ」は標準語であるがゆえの印象が目立つ。⑤場所のイメージでは「関東」(27人)、「東京」(7人)などが大半を占め、⑥使用者や⑦言葉自体にも冷たさや堅さを感じる人が多いようである。

本研究で注目している「～ヤン」については「奈良」「三重」など具体的な地名の回答が目立ち、関西の方言だと考える一方で、特定の外部(主に関西の地方部)から流入してきたものであるという共通認識も強く存在しているようである。「抵抗がある」(6人)とを感じる人もいる一方で、「かわいい」(19人)という回答も目立ち、「使ってみたい」という意見もある。人により大きく印象が分かれているという特徴がみられる。

5.3. 各否定辞に対するイメージの全体像

ここでは、5.1節、5.2節で示した結果を形式ごとにさらに詳しく見ていく。

5.3.1. 「～ヒン／ヘン」に対するイメージ

まず「～ヒン／ヘン」の形式について、他形式と比べて親しみがあがり、抵抗感が少ないという結果が出たが、これは京都、ひいては関西において最も一般的な方言形であるため当然の結果であるかもしれない。「～ヒン／ヘン」は京都府南部の若年層にとって最もポピュラーで愛着のある表現であると言えるだろう。

最も親しみがあがり一般的な語彙であると同時に、柔らかく女性的なイメージがあるのは、田中(2013b)で言及されていた関西弁・京都弁自体の持つ「かわいい」「女らしい」イメージが起因しているのではないかと考えられる。また近畿地方全体を対象とした梁瀬(2020)の調査では、「親しみがある」と感じる人が多い点は共通しているが「かわいい」と答えた人はかなり少なかった。京都方言話者の自方言に対する愛着や、他府県出身者からみた京都方言への印象などが関係しているのではないだろうか。

否定辞使用意識調査(4節)の結果と絡めて総括すると、京都府南部の若年層では「～ヒン／ヘン」を好んで使用している人が多く、そのため動詞の種類に関わらず最も使用が多い、と言える。また、京都弁自体への愛着や印象が作用しているのか、全体的に柔らかで女性的な印象を持つ人が多い一方、使用者は老若男女を問わないようである。

5.3.2. 「～ン」に対するイメージ

続いて「～ン」の形式に着目すると、その印象は同じ従来の方言形式である「～ヒン／ヘン」とは大きく異なっていることがわかった。「親しみがある」と回答する人は多いものの、「～ヒン／ヘン」と比べると少ないこと、さらに自由記述の回答では明らかに抵抗感を示す人が多いことから、京都府出身者は「～ン」に対して田中(2013b)のいう大阪の「怖い」イメージを当てはめていることが予想される。

「～ン」については、関西方言として認識していると同時に、京都の方言ではないと捉えている人もいるようである。多くの動詞で半数を超える人が「～ン」を選択していないこと

は、こうした意識も作用した結果なのかもしれない。

5.3.3. 「～ナイ」に対するイメージ

さらに標準語形の「～ナイ」について見ると、5段階評価ではどの項目においても中間の「3」が占める割合が大きかった。「③親しみ」において「5」や「4」を回答している人が最も少なく、「②かわいい」（段階 5）と回答した人がいないことなどからも、平山編（1997）で述べられているように、標準語形に対して無機質でつまらない言葉であると感じている人が多いと考えられる。そして裏を返せば、京都府南部の若年層は方言形に対する親しみや愛着が強いとも捉えることができる。

自由記述の回答を見ても、標準語であるがゆえの印象が目立った。東京・関東へのイメージというよりは、ニュースなど公の場で使われる言葉というイメージが、冷たい印象や距離感、あるいは上品で丁寧な言葉であるという印象も生んでいるのかもしれない。

5.3.4. 「～ヤン」に対するイメージ

最後に本研究が注目する「～ヤン」であるが、5段階評価においても自由記述の回答においても、回答にかなりばらつきがあるのが興味深い。新たに流入してきた形式であるからか、人によってその捉え方が大きく異なっているようである。

先行研究では「～ヤン」の京都への流入について触れられていないことが多かったが、「③親しみ」に関しては標準語形と比べてもはっきりと差が出ているため、京都府南部の若年層も「～ヤン」を関西方言の一つとして認識し始めているように思われる。インフォーマントの中には、「～ヤン」をかわいく女性的であると捉える人も多い。しかしながら、「③親しみ」「②かわいらしさ」の両項目において、その対極の印象を持つ人が少なからず存在することも事実である。

さらに自由記述の回答では具体的な地名の回答が立ち、関西方言だと考える一方で、特定の外部（主に関西の地方部）から流入してきたものであるという共通認識も強く存在していた。このような結果を踏まえると、以下のことが考えられる。

「～ヤン」はもともと三重や和歌山で使用されていた表現であり、また、奈良などから京都に入り込んできている。おそらくそのことを京都方言話者も認識しており、「～ヤン」に対して奈良・三重・和歌山といった関西のローカルな地域、いわゆる「田舎」のイメージを当てはめている。そうした中で「馴染みのない田舎の言葉→かわいい→使ってみたい」、「都市部ではない地方の言葉→野暮ったい→使用したくない」という二通りの考え方・立場が生まれているのではないだろうか。

6. 「～ヤン」の使用と否定辞に対するイメージの関係

4 節と 5 節で示した結果をもとに、以下では「～ヤン」の使用と各否定辞に対するイメージとがどのように関わっているのかについて考察する。

6.1. 「～ヤン」の使用と否定辞に対するイメージの関係

まず 5 節で得られたイメージ調査の結果を俯瞰すると、京都府南部の人々は自身の方言に確固たる愛着、親しみを持っているように思う。そして「～ヒン／ヘン」以外の形式において、「京都らしくない」、「よその地域のイメージがあり使いたくない」、といったコメントが散見されたことから、「京都」とそれ以外の地域の間に線引きがあり、それぞれにはっきりとしたイメージを持っているようである。「～ヤン」をはじめとする否定形式に関しても、それぞれの形式に対応する地域が把握されており、その地域に対してもつイメージに基づいて自身の使用語形を決めているのではないだろうか。

方言に対するこうしたスタンスと否定辞使用意識の結果を総合すると、次のようにまとめられる。京都府南部の若年層は、基本的には「～ヒン／ヘン」を使用し、先行研究が示す通り動詞の拍数や音韻的制約などの問題を回避する必要がある場合に限り他の否定形式を使用する。しかしながら、否定辞の中には、それらが付随してもつ地域イメージなどによって、話し手が使用に抵抗を感じる形式も存在する。その中で、「～ヤン」に対して「かわいい」などの良いイメージを持つ、もしくは「～ナイ」や「～ン」に対して抵抗感を持つ人が「～ヤン」を使用しているのである。ただし今回の調査は談話調査ではなく、あくまで自身が使うと「思う」ものを選んでもらう意識調査であったため、語幹の拍数や音韻的制約といった文法的な面や実際の会話での使い勝手よりも、イメージの面が結果に色濃く反映された可能性は高い。動詞の活用型による差があまり見られなかったのは、そのためであろう。

6.2. 「～ヤン」使用者の分析

前節では 4 節と 5 節の全体の結果から得られる否定辞使用とイメージの関係について述べたが、ここでは、「～ヤン」使用者にしばってイメージとの関係を探りたい。否定辞使用意識調査において「～ヤン」をいずれかの動詞で選択した人は 13 名で、女性は 8 名、男性は 5 名であった（4.1 節、表 3 参照）。次の《図 7》のうち、左側が「～ヤン」使用者による 5 段階評価の結果である。母数は異なるが、比較対象として右側に非使用者 47 名（うち女性 29 名、男性 18 名）の 5 段階評価の結果も示している。《図 6》と同様、図中の数字は回答者の数を示している。

使用者・非使用者の結果を比較すると、まず使用者の中に「～ヤン」に対して男性的なイメージを持つ人や「かわいくない」と感じている人は少ないと言える。自由記述の回答では、「～ヤン」の使用者はそのイメージについて「かわいい」と回答する人が多かった他、「②かわいらしさ」において「5」を選んだのはすべて女性であったことなどからも、少なくとも女性の「～ヤン」の使用には語の持つ柔らかいイメージやかわいいという印象が関わっているようである。

従来の形式である「～ヒン／ヘン」「～ン」に対しては、目立った差は見られないが、「～ヤン」使用者では「～ン」にやや男性的であるとする回答が多い。

そして興味深いのは「～ナイ」において最も差が顕著に表れている点である。使用者の性別のイメージでは中間の「3」の回答率が圧倒的に高い他、「②かわいらしさ」において「1」や「2」と回答している人が多い。さらに「③親しみ」「④抵抗感」を見ると、あきらかに「～

京都府南部における動詞否定形式「～ヤン」の受容とその要因

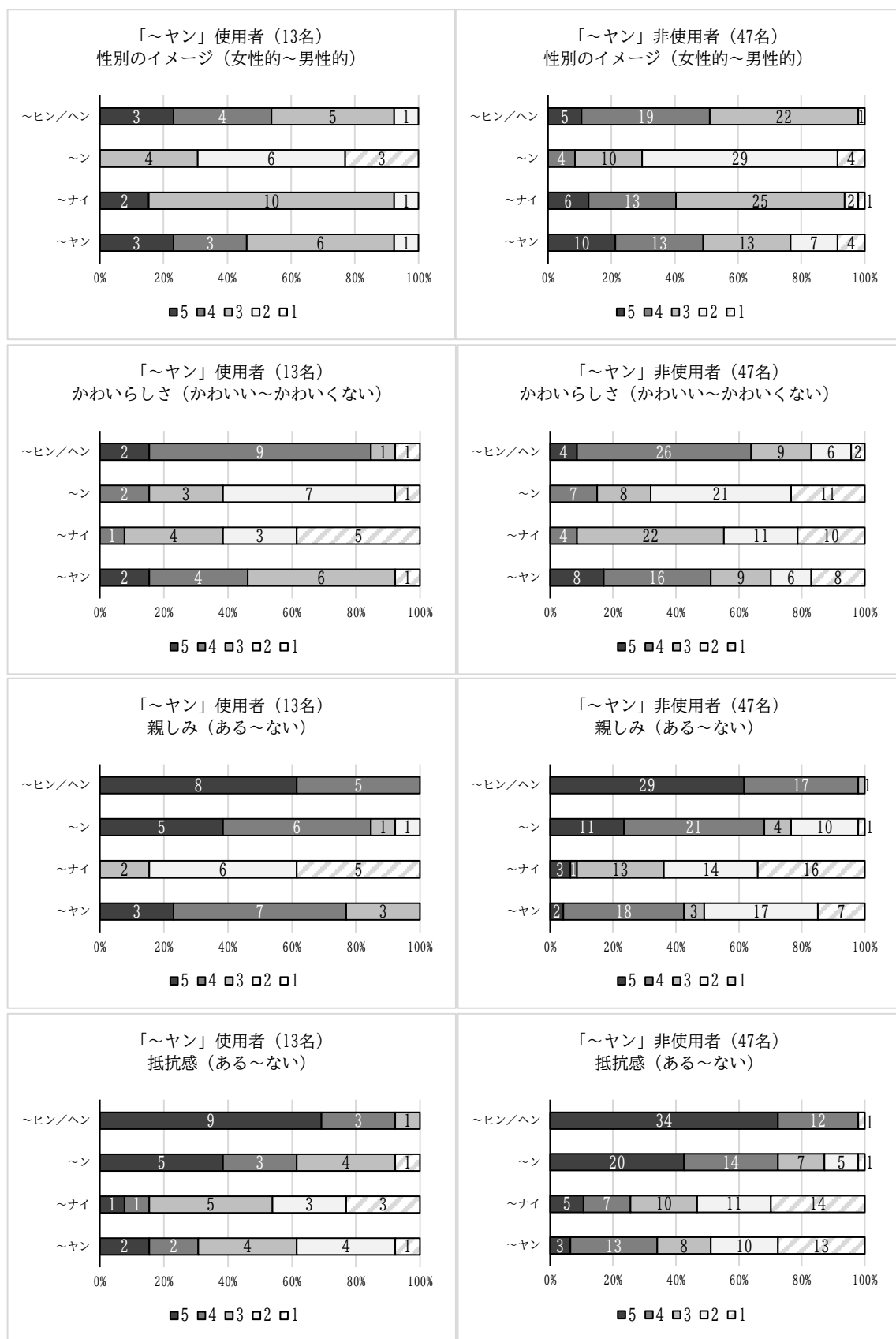


図7 「～ヤン」使用者（左）と非使用者（右）の比較

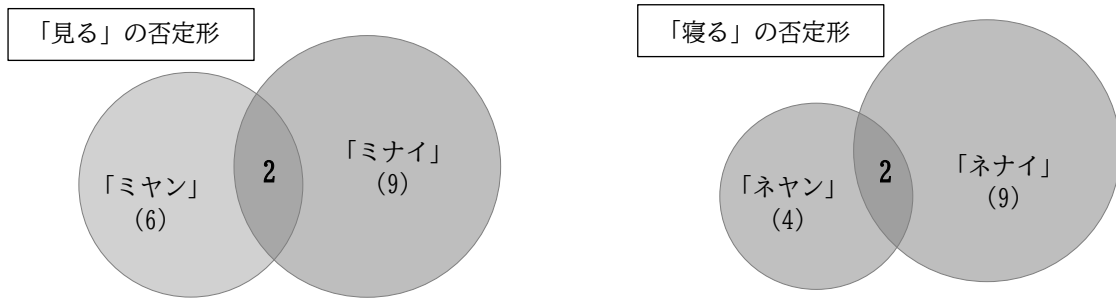


図8 「～ヤン」使用者と「～ナイ」使用者の重なり

ヤン」使用者は「～ナイ」に対する抵抗が強いようである。自由記述の回答でも、「～ヤン」使用者は「～ナイ」に対して「冷たい」「好まない」などマイナスの評価が多く、無機質で硬いイメージから、「性別のイメージ」において男女どちらでもない中間の「3」が選ばれた可能性がある。

これらを踏まえるとやはり、音韻的制約のためにこれまで「～ナイ」が取り入れられていたが、さらに標準語形を回避しようとして「～ヤン」を受け入れる人がいる、と考えることができる。実際に一段動詞における否定辞選択の状況を見ると、「～ヤン」「～ナイ」の両方の形式を選択した人は、《図 8》のとおり少ない。ここまで分析してきたような地域や語へのイメージなどから、「～ヤン」を受容する人と「～ナイ」を受容する人に分かれている可能性がある。

6.3. 「～ヤン」受容のプロセス

この節では、使用する否定辞の調査結果と、否定辞に対するイメージの調査結果をまとめつつ、その両方を踏まえて「～ヤン」受容のプロセスについて考える。

否定辞使用調査の結果では、京都府南部の若年層にも動詞の否定形式「～ヤン」の流入がわずかながら見られた。一方で先行研究と同様に、京都府では動詞の活用型・拍数に関わらず基本形では「～ヒン／ヘン」の形式が優勢である。しかしながら拍数に注目すると、明らかに2拍語において「～ヤン」の使用が増加するため、より拍数の短い方へ変化する流れが「～ヤン」の受容に少なからず関わっていると考えられる。より拍数の短い形式へ変化する中で、「～ン」「～ナイ」が使われていたところに、「～ヤン」が新しい選択肢として登場しているとみられる。

否定辞に対するイメージの調査結果からも、京都の人々は明らかに「～ヒン／ヘン」の形式に愛着を持っており、「～ヤン」を含む他の3形式には少なからず抵抗を持つ人が存在することがわかった。特に「～ヤン」の印象は人により様々であり、「かわいい」といった良い印象を持つ人のみが使用しているようである。基本的には「～ヒン／ヘン」を使用したいが、拍数の短縮や音韻的制約の回避が必要な場合には「～ン」「～ヤン」「～ナイ」の中から自身にとって印象の良いものを受容しているとみられる。特に「～ン」の持つ音韻的制約を回避するにあたって「～ヤン」と「～ナイ」のどちらを受容するかは、標準語形に対して持つイメージなどが関係し、人によって分かれるところであるようだ。こ

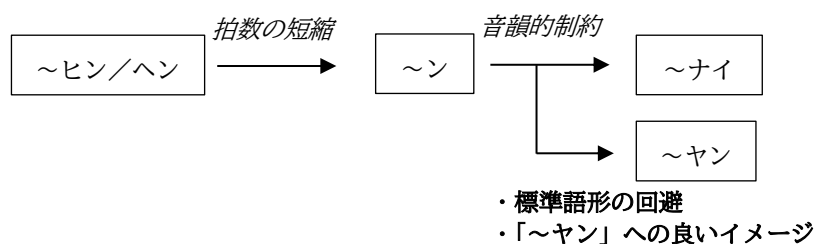


図9 「～ヤン」受容のプロセス

のような「～ヤン」の受容プロセスをまとめると《図9》のようになる。なお図中の斜体部分は言語内的要因を、太字部分はイメージに関わる要因を表している。

ただし、図9のような受容のプロセスを考えると、「～ヤン」の受容は一段動詞に顕著に表れることが期待されるが、今回の調査結果では動詞の活用型等に関わらず似通った結果となった。談話調査など、実際の使用を捉える調査によって、この点を検証する必要があるだろう。

7. まとめと今後の課題

今回の調査の結果より、京都府南部の若年層にも動詞の否定形式「～ヤン」がわずかながら流入していることが分かった。一方でその受容は限定的なものであり、京都府では活用型・拍数に関わらず基本形では「～ヒン／ヘン」の形式が優勢である。より拍数の短い方へ向かう流れが「～ヤン」の受容には関わっており、より短い拍数の形式への変化の中で、「～ン」「～ナイ」が使われていたところに、「～ヤン」が新しい選択肢として登場していると考えられた。否定辞に対するイメージからも、基本的には「～ヒン／ヘン」を使用したいが、言いやすさや伝わりやすさを求める中で「～ン」「～ヤン」「～ナイ」のうち自身にとって印象の良いものを受容しているという傾向がうかがえた。

京都府、中でも京都府南部は大阪・奈良との物理的距離が近く、和歌山・三重などから大阪・奈良に流入した「～ヤン」の形式が京都に流入することは自然なことであると思われる。アンケートでも中学・高校においてほとんどの人が奈良県・大阪府の人と交流があったと回答している。一方で「～ヤン」は大阪・奈良と比較すると、現時点では京都ではマイナーな形式であると言わざるを得ない。これには今回の調査でみられたような県民性・方言への意識が作用しているものと思われる。

今回の調査結果では、動詞の活用型による違いなど、言語内的な要因は「～ヤン」の使用に影響がないようであった。これは、「使うと思うものを選ぶ」という使用意識の調査であったことが関係するかもしれない。意識調査であったことで、文法的な傾向、機能的な面、使用実態よりも、方言に対する意識やスタンスがより顕著に現れてしまっているのではないかと考えている。また、無意識のうちに終助詞を頭の中で補って話し手をイメージしている可能性や、比較対象として書き言葉や敬語を想定した可能性なども否めず、正確な使用実態を掴めたとはいえない。談話調査なども視野に入れつつ、こちらは今後の課題としたい。

【参考文献】

- 岸江信介（2014）「近畿・四国地方における言語変化—動詞否定形式を例として—」小林隆編『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論—』pp.227-244, ひつじ書房.
- 高木千恵（2004）「若年層関西方言の否定辞にみる言語変化のタイプ」『日本語科学』16, pp.25-46, 国立国語研究所.
- 田中ゆかり（2013a）「言語意識から見た地域類型」木部暢子ほか編『方言学入門』pp.108-111, 三省堂.
- 田中ゆかり（2013b）「ヴァーチャル方言と方言ステレオタイプ」木部暢子ほか編『方言学入門』pp.112-115, 三省堂.
- 鳥谷善史（2015）「関西若年層の新しい否定形式「～ヤン」をめぐる」『国立国語研究所論集』9, pp.159-176, 国立国語研究所.
- 日高水穂（2014）「近畿地方の方言形成のダイナミズム—寄せては返す「波」の伝播—」小林隆編『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論—』pp.245-264, ひつじ書房.
- 平山輝男編（1997）『京都府のことば』（日本のことばシリーズ26）明治書院.
- 梁瀬萌恵（2020）『近畿地方で使用される動詞否定表現の印象について』2020年度関西大学文学部卒業論文（未公刊）.
- 山崎直哉（2016）『大阪における動詞否定表現「～ヤン」の受容について』2016年度関西大学文学部卒業論文（未公刊）.

ながた ゆきえ（大阪大学卒業生）